組織学的に未検で黄色腫細胞を証明していないが一応 Hand-Schüller-Christian 氏病と診断し，之にコーチゾン，デキサメサゾンを使用して骨欠損部の減少を来した一例を報告。なお，その後の経過を現在観察中である。

33) 小児に於ける白血球貪喰能の測定に就て

椿　英一，°土屋与之，永島敬士
（中央鉄道）
上原すず子（千葉大）

中性嗜好白血球の炭末貪喰能を測定し，成人では高値を示すが，学童幼児期，乳児期と年令の小なるに従つて低値を示す傾向を認めた。未熟児の貪喰能は最も低い。ネフローゼ症候群，リウマチ熱では貪喰度の低下傾向を認めるが，貪喰率には著変を見ない。副腎皮質ステロイドの投与は比較的速かに貪喰能の低下を来し，其投与量及び投与期間の大なる程貪喰能の抑制が強度の様に思われた。この事は副腎皮質ステロイドによる感染症の誘発乃至増悪の危険性を示唆する。次に網内系機能賦活作用を有するコリンの白血球貪喰能に及ぼす影響を臨床例について観察し，副腎皮質ステロイド投与時コリンを併用すると貪喰能の抑制が相当予防されることを認めた。未熟児に対するコリンの適用も貪喰能の上昇傾向を見たが，更に例数を重ねて検討し度い。最近 Karnovsky (1961) により白血球の貪喰機転に於ける燐脂質代謝の重要性が認められたが，燐脂質代謝を促進する作用を有するコリンの貪喰現象に於ける役割は極めて興味深い。

34) 神経症的症状と夜尿の関係に就て

°石橋　祝，布川武男，中塚博勝
（保田児童福祉園）

近年小児の神経症に就ても関心が高まり，色々論議されている。当虚弱児施設に於て夜尿の背景をなす精神的・身体的症状に就て調査し観察した。

24名の夜尿児は夜尿の他に二，三の神経症的症状を伴つている。腹痛，チック，指しやぶり，異嗜，夜驚，自瀆，疳癪，幼児語，吃音等が認められ，夜尿のみのものはいない。従つて夜尿は神経症症状群の一面にすぎないと思われる。

神経症傾向児童は39名（50.6%）で年少児に多く5～6才で91.7%，7～9才は73.7%である。男児は30名（68.2%）で女児（9名：27.3%）の2.5倍である。出身別では5才前（幼児期）より施設にいたものが非常に多い。

神経症傾向児童の知能（WISC）の発達は遅滞している傾向にあり，特に年少児に著しい。WISC の Discrepancy Graph にて知能構造は動作性優位の傾向がみられる。ロールシャッハテストの結果からパーソナリテイに就てみると情緒の発達が未成熟であり，対人関係に不安をもちやすく他人との情緒的接触に臆病である。適応性は一般に低く，このことは交友関係調査によつて社会的地位が低いということからも裏付けられる。

35) 尿ヂアスターゼ測定成績（小児急性膵臓炎の検索）

神田勝夫，中田益允（君津病院）

健康児の尿ヂアスターゼ値（Wohlgemuth 法）は乳児0～8単位，幼児・学童4～32単位であつた。諸疾患54例の尿ヂ値で高値を示したものは流行性耳下腺炎（7/11例）及び腎炎（3/8例，発病初期の例）に認めた。上腹部痛を訴える患者22例の尿ヂ値は4～128単位で，高値を示したものが8例あつた。これら22名のうち経過を観察し，急性膵臓炎と診断し得た患者は9例あつた。この患児の尿ヂ値は病日と関係あり，発病初期（2～3病日）のみ高値を示し，8病日以後は正常範囲にある。従つて急性膵臓炎の診断には尿ヂ値を早期かつ屢々測定する必要がある。

36) 舞踏病様運動を呈せる脳海綿状血管腫の1剖検例

°有益　忍（千葉市）
山本洋三（千葉大）

患児　○崎○子，昭和24年9月2日生。

昭和30年6月，全身の舞踏病運動特に右上肢異常運動，顔面の異常運動を主訴として千葉大小児科外来を訪れ，小舞踏病の診断の下に種々治療をうけ約1カ月にて軽快退院，その後特別の事なく約3年後再び上記症状を訴えて小児科外来に来院し，この頃より頭痛，嘔吐，悪心を訴え始めた。又皮質性運動失語症を呈すも治療により軽快し通学して居たが，昭和34年8月再び上記症状現われ特に嘔吐，偏頭痛著明となり，当医院に来院，脳腫瘍を疑い再び千葉大小児科に入院，精密検査の結果脳海綿状血管腫と診断され，コバルト療法開始。一時症状軽快するも，再び増悪し，その後家庭事情により退院し当院にて往診す。12月30日に急性肺炎症状を呈し